

当報告の内容は著者の著作物です。

Copyrighted materials of the author

第2回（通算第15回）基幹研究「人類学におけるミクロ-マクロ系の連関」公開セミナー

平成24年7月4日（水）14:00-18:00 AA研301号室

マレー半島の広告記事にみるメディアの変容と華人社会

櫻田涼子（AA研ジュニア・フェロー）

本発表では、1929年にシンガポールで創刊され、今日のマレーシアで発行される日刊華字紙『星洲日報』に掲載された広告記事の形式、内容の通時的変化を検討することにより、マレー半島の華人社会がいかに変容してきたかを明らかにした。

本発表が分析資料として扱った「広告記事」とは、主に個人が規定された料金を支払い新聞会社に掲載を依頼する告知を目的とする広告記事を指す。伝統的に、マレー半島で発行される華字紙にはこのような広告記事が数多く掲載されてきた。それは例えば、葬儀案内を兼ねた死亡告知記事（訃告）や、死者が生前に所属していた社会組織により掲載される弔意記事（挽詞）、遺族による葬儀参列に対する謝意の表明記事（泣謝）、結婚報告記事（結婚祝賀記事）、親子関係や兄弟関係などの終焉を公にする記事（脱離関係）、新事業・新店舗の開業を祝う記事（開店祝賀記事）、州王スルタンなどによる称号賦与や学位取得、昇進などを祝う記事（荣誉称号祝賀記事）など実に多岐に渡る。

本発表では、マレーシア国立図書館・シンガポール国立図書館に所蔵される『星洲日報』の創刊年1929年、1935年、1941年、1950年、1960年、1968年、1970年、1980年、1990年、2002年、2012年の各1ヶ月分（1月）のマイクロフィルム、及び調査地のインフォーマント家庭に保管されていた広告記事を調査し、それらを9つのカテゴリー（訃告、挽詞、泣謝、訃告更生、年忌供養、結婚祝賀、荣誉祝賀称号、開店祝賀、通知）に分類した上で、その数量的変遷と記載内容の変容を明らかにした。

2000年代以降の広告記事の約9割が死に関する記事であったため、独立以前のマレーシア社会の主たる関心事は死であると仮定した上で調査を実施したが、調査・分析の結果から明らかになったのは、独立以前のマレー半島の華人社会では、他者と他者を結び付ける婚姻の方が重視されていたということである。

例えば、結婚報告記事の掲載数の変遷は、1935年の59.6%をピークに1960年代までは40%を占めていた。しかし1980年代になると10%を下回るようになり、2012年には0.4%と極端に減少した。一方、訃告や挽詞など〈死に関する記事〉の掲載率は1929年にはわずか1%、1941年から1970年までは30%前後を推移しており、その掲載数はさほど多くなかった。しかし、1980年以降には全体の半数を占めるようになり、2000年代になると80%を占めるまでに増加していた。このように広告記事の掲載数を比較してみると、かつては結婚が重視されていたが、今日では死と葬儀が重視されていることが明らかとなった。

また、記事を掲載する主体も大きく変化していた。例えば1950年代に掲載された荣誉祝賀記事において、荣誉を祝うのは祝われる当事者が所属した同郷団体や同業団体などの社会組織やその友人たちであったが、2000年代になると称号授与を祝う主体が家族へと変化していた。同様に、1970年代までは死者

の所属する同郷団体や同業団体などの社会組織が中心となり葬儀委員会が組織されている様子が訃告から読み取れたが、1980年代以降訃告で葬儀を通知する主体は家族・親族が中心となっていた。

以上の傾向から、死に関する記事の増加は極めて今日的な事象であることが明らかとなった。また広告記事のカテゴリー別の掲載割合、記載内容についても時代による大きな差異が認められた。2000年代になると親族（女性傍系親族も含む）を中心とする訃告がほとんどとなり、かつて見られた社会組織や業縁による広告記事はあまり見られなくなった。とはいえ、すでに移民社会とはみなされなくなって久しいマレーシア華人社会において、親族以外の社会関係である互助組織などの社会関係がもはや重視されなくなったというわけではない。かつて訃告で重視されていた男性が所属する社会組織を中心とする社会関係は、今日、家族・親族の関係性が表明される訃告、それ以外の人間関係が表明される挽詞とに分離され、死という局面に故人の生前の社会関係を具体的に可視化させる役割を担うようになったのである。このようにして、本発表ではマレーシア華人社会のあり方が、社会組織から家族を中心とする関係へ変化しつつあることを、広告記事の分析を通じて指摘した。